

弘前城石垣修理

第12回～平成29年度の調査結果～

今年度の弘前城跡本丸石垣解体工事は、昨年12月15日で終了しました。

今年度の調査を振り返ると、前回で紹介した弘前城独特の形と評価されているイカ型の角石などの他に、新たに天守台石垣背面の盛土の様相や本丸東側平場に位置する井戸遺構、排水遺構に関する発見がありました。



天守台下部の石垣は、大正時代の改修で築かれた石垣とそれ以前までに築かれた石垣とで構成されていました。改修以前の石垣は、縄文時代の土器を含む土層の上に、石垣を築くために掘削した粘土や土を盛土し、その前面に築石と裏込めを積み上げて築かれていました。また、天守台天端付近の石垣は下部の石垣と構造が異なり、盛土は粘土と礫（小石などのこと）を互層状に突き固め、築石にはチキリやダボという接合具を多く用いて、接する築石同士をつなぎ止めて固定する工夫が施されていました。一方、大正時代の改修で築かれた石垣は、改修前の盛土の上に新しい盛土が盛られ、その盛土と新しい裏込めの境には比較的大きな石が階段状に積み上げられていました。また、明治時代の石垣崩落面の裏込め部分には、崩落防止の粘土が貼り付けられており、大正時代の改修時にも崩落防止の工夫が施されていたことがうかがえました。

井戸遺構は、少なくとも同じ場所で2度に渡って築造された跡があり、これらは出土遺物から江戸時代と近現代に造られたものと考えられます。江戸時代の井戸遺構は大きさが約5mの楕形で、石垣に接する東壁だけが石垣の裏込めが崩れないように大きな石を積み上げて造られていました。



排水遺構は、井戸などからの排水を石組の暗渠（あんきょ）を通して蛇口から内濠へ流すための施設です。暗渠には水漏れ防止のために粘土を充填していましたが、経年劣化により水が漏れ、周辺の地盤が浸食されていました。このような地盤の劣化も石垣の膨らみの原因の一因と考えられます。

石垣解体工事は来年度も継続して行い、今後も石垣の構造や歴史的価値、膨らみの原因などがより一層明らかになるよう慎重に調査を進めていきます。



※弘前城本丸石垣修理事業について、詳しくは下記URLをご覧ください。

<http://www.city.hirosaki.aomori.jp/ishigaki/index.html>

■問い合わせ先 公園緑地課弘前城整備活用推進室（弘前公園緑の相談所内、☎33・8739）